

新たな人物像脚光

庄内藩出身の幕末の志士清河八郎（1830～63）が没して今年で150年。故郷の庄内町では明治維新の先駆けと言われる偉業が今なお語り継がれ、近年は再び光を当てる動きが広がっている。ゆかりの地を訪ねた。

藤沢周平 生涯調べ上げ

リポート
やまがた



清河八郎像—
清河八郎記念
館提供

最上川に面した庄内町清川地区。整然と並ぶ家並みがかつて栄えた舟運の宿場の面影を残す。更地となっている清河八郎の生家跡から5分ほど歩くと、緑に囲まれた荘厳な社が現れた。清河を文武両道の神として

まつる清河神社だ。没後70年にあたる1933年に住民らによって建てられた。神社に隣接する清河八郎記念館には、貴重な史料が多数保存されている。母親と西国を旅した際に記した日記「西遊草」、暗殺される



史料の解説をする広田館長。「『清河八郎』という名には文武両道を極めんとする思いがこめられている」—庄内町清川の清河八郎記念館

清河八郎

出羽国清川村（現庄内町清川）の酒屋の長男、斎藤元司として生まれる。18歳の時に家出して江戸で学問を学び、最高学府の昌平黉に入学。清河八郎と改名し、私塾を開く傍ら、北辰一刀流も修めた。桜田門外の変をきっかけに尊皇攘夷（じょうい）運動に傾倒。同志と「虎尾の会」を結成し、全国の尊攘派志士と交わった。1862年、上洛（らく）する將軍警護を名目に浪士組編成を幕府に認めさせ、上洛後に浪士組を尊皇攘夷の急先鋒（きゅうせんぽう）へと転回させた。これに反発して浪士組を離脱した者たちが後に新選組を結成した。幕府に危険視され、63年4月、江戸・麻布で暗殺された。

前日に両親に送った手紙、のちの新選組のメンバーらも署名した浪士組名簿など、県や町の指定文化財だけれども約500点。全国から足を運ぶ歴史ファンの姿は絶えない。

「清河のイメージアップのため、史料に基づいた事実を伝えていくのが私たちの役目」と同記念館の広田幸記館長（68）。司馬遼太郎らの歴史小説で、主人公と対立する敵役として描かれ、負のイメージがつきまとい、「山師」「策士」と評されることもある。

しかし、記念館の史料に触れると、文武両道を極めんとし、国事に情熱を傾けた生きざまを知ることができ、

前日に両親に送った手紙、のちの新選組のメンバーらも署名した浪士組名簿など、県や町の指定文化財だけれども約500点。全国から足を運ぶ歴史ファンの姿は絶えない。

「清河のイメージアップのため、史料に基づいた事実を伝えていくのが私たちの役目」と同記念館の広田幸記館長（68）。司馬遼太郎らの歴史小説で、主人公と対立する敵役として描かれ、負のイメージがつきまとい、「山師」「策士」と評されることもある。

自然や歴史を通じて地域活性化に取り組むNPO法人「元気・まちネット」（東京）は、地域おこしの素材として着目。かつて清河が歩いた道を自ら歩いて調査する活動を09年から始め、18歳の清河が江戸に出奔した時のルートである庄内から六十里越街道を通り、寒河江、山形を抜けて上山に至る約150キロを完全踏査した。今はなくなった山道も探し出し、このルートを「回天の道」と名付けた。

出奔の道町おこし活用

動きは県外にも広がる。新選組との関わりが深い東京都日野市との交流も始まった。同市の「新選組のふるさと歴史館」と庄内町の

から150回忌にあたる2010～12年の3年間、数々の記念事業を行ってきた。清河と獄中死した妻・お蓮の合同の法要を2人の墓がある地元の歓喜寺で営んだほか、特別企画展やシンポジウムを行ったり、お蓮の悲劇を描いた演劇を上演したりした。

戸沢村出身で同ネットの矢口正武代表（66）は、高校卒業後に上京した自らと重ね合わせ、「回天の道」を生かした文学散歩の旅などさまざまなイベントを企画し、観光振興や交流人口増加に結びつけようと知恵を絞っている。

矢口代表は「清河は山形の誇りであり、もっと多くの人に知ってほしい。ふるさとを元気にする火付け役になりたい」と話す。

（中野龍二）